

「『オイディプース王』再考」を拝読して

川島重成

岡道男先生の絶筆となった「『オイディプース王』再考」を拝読して、いかにも岡先生らしい、精緻なテキストとの格闘、精力的な学問的論争を最後まで貫かれた、その古典文献学者としての誠実なお姿に、心からの畏敬の念を覚えております。この御論考の注(1)において、畏れ多くも私は先生の「オイディプースと真実——ソポクレーズ『オイディプース王』の劇構造を中心に」『ギリシア悲劇とラテン文学』岩波書店、1995に対する批判者の一人として名前が挙げられています。なにはともあれ、先生を中心とした論争の環の中に加えていただいたことを、私は誇りに感じています。

『西洋古典学研究』48、2000の巻頭を飾る今回の御論文は、周知の通り、1993年以来、藤澤令夫先生をはじめ、丹下和彦氏、小川正廣氏そして私を含む何人かの古典研究者の間で交わされた、オイディプースは真実追求者か、それとも真実からの逃亡者か、という問題をめぐる一連の論争に対する、岡先生の最終的な御見解の開陳であった、と考えられます。今回の御高説の新たな展開に接して、少なくともこの問題に関する限り、私自身は先生がお考えになったほど単純な“批判者”ではなかったのではないかと思わされましたので、その点を多少とも明らかにして、御学恩に対する感謝に代えさせていただきたく存じます。

私はかつて『「オイディプース王」を読む』講談社、1996、260頁で、以下のように書いています。

テイレスアースとの場面におけるオイディプースは、岡が強調するほど、恐怖にかられ、その有罪告発（つまり真実）から逃げようとしていたとは思えない。むしろ、彼は、怒りの感情に支配されていて、テイレスアースが告げる真実が真実と思えなかっただけである。彼の主観においては、ラーイオス殺害犯糾明という点で、彼はあくまでも「真実追求者」であった。

ここで「真実追求者」と、括弧付きで記しているのは、岡先生が今回次のように書いておられることと、実質的にほとんど差はないと、改めて思い至ったのです。

Oi.は、「真実追求者」説のいう意味での真実追求者、「一途な真実追求者」ではありえない。勿論私は、彼が真実を求めていることを認めている。彼の場合、真実を求めない（真実を明かさない）限り神託・予言の成就を避けることができない状況に置かれているからである。（14-15頁）岡先生が言われる通り、オイディプスは、ソークラテースがそうであるように自覚的な意味で真実追求者であった筈はありません。ラーイオス殺害犯を究明してテーバイを救いたい、それが彼のこのドラマにおける行動の動因でした。それにもかかわらず、私がここで括弧付きではあれ、あくまでも「真実追求者」ということに拘ったのは、『オイディプス王』は、アポローンの神託が実はすでに成就していたことが明らかにされる、オイディプスがそれを発見するということで象徴的に示される、隠されていた真理の開示、文字通り ἀλήθεια をめぐる悲劇に他ならない、と考えるからです。

さらに、岡先生も本文において二度にわたって（4頁、7頁）肯定的に引用して下さっているように、拙著260頁で（先ほどの引用に続く部分で）次のように書いています。

しかしその「真実追求者」が、真実を知る者の客観的立場からすれば、「神託を逃れんものともがく牡牛」に他ならなかったのである。それ故、オイディプスは、「真実追求者」か「真実逃亡者」かとあれかこれかを問う問いは、無意味ではないか、とわれわれには思える。

ここですでに述べていますように、私は今回岡先生の御論文を拝見していて、オイディプスは「真実追求者」か「真実逃亡者」かと、黒白を付けるのは不必要なことと、ますます確信するに至りました。これが一連の論争の一つの成果であった、と言えるのではないのでしょうか。それでも解釈者それぞれの見解に、どうしても否定し難い、あるニュアンスの差異は残る——これは当然そうあってしかるべきことでしょう。

私は上記の第二の引用部分から明らかなように、オイディプスは主観的には「真実追求者」（ラーイオス殺害犯探求者）でありながらも、真実を知る者（アポローン、テイレシアース、観客）の客観的立場から見れば、真実逃亡者であったと示唆しています。その意味においては岡先生の御主張を批判しているどころか、実質的にはそれを取り入れて私の解釈を展開しているのです。

さて、今回の岡先生の御論考は、従来から御主張の中心テーゼであるオイディプス伝説の基本構造と『オイディプス王』の劇構造の対応を、「外部から観察する」者の視点から、より明確により厳密に展開されたものと、言うこ

とができるでしょう。すなわち次のように記されています。

私のいう基本構造と劇構造の間には認識または意識に関してはいかなる対応関係もありえない。私は「神託・予言の成就を避ける、このことが神託・予言の成就を招く」という構造そのものの対応関係が存在することを指摘している。そしてこの構造は観察者によって一連の行動の中に紛れもなく看取される。(3頁)

そしてこの外部からの観察者の視点とは、私の言う「真実を知る者の客観的立場」に他ならないことを指摘されています(4頁他)。このように岡先生御自ら、私が御主張に対する単なる批判者ではないことをいわば裏書きして下さったのです。

しかしそれにもかかわらず、もちろん岡先生と私の解釈が互いに相違するものであることは申すまでもありません。それは岡先生が(今回の御論考で特に)、外部から観察する者の視点に限定して御主張を繰り広げられた、まさにその点に関わっています。それに対して私は、オイディプスを見る大きく分けて二種類の目が存在することこそが、アポローンの真理の開示としてのこの悲劇に本質的であると考えなのです。二種類の目とは、ドラマの内部にいる者の目と、ドラマを外側から見ている目です。前者は、テイレシアースという重要な例外を除いて、オイディプス本人を含む全ての登場人物たちの目ですが、この目はドラマに展開する出来事に巻き込まれてその真実が見えないのです。他方でこのドラマを外側から見ている観客の目があります。観客はオイディプス伝説に通暁している者であり、そのような特権的な位置にある者としてこの悲劇におけるオイディプスの無知の実態をも見抜くことができます。事実、演劇の本質的構成要素としての観客の目がこれほど見事にプロットの中に構造化されているドラマも、数少ないと言って良いのではないのでしょうか。この点でテイレシアースは、ドラマの内部にしながら、すべてを知るアポローンの予言者として、観客と等しい視点を付与されている例外者です。彼が盲目であるとは、この例外者が神知の代償として身体に負わされた疵に他ならない、と言えましょう。観客とテイレシアースは、いわばアポローンの目をもって無知なるオイディプスに相對しているのです。

しかもこの観点の対立は固定したままでは留まってはいません。オイディプスはこの悲劇において、まさに知らぬ者から知る者へと変容せしめられます。これが真理の発見(アナグノーリシス)の悲劇としての『オイディプス王』のプロットの展開に他なりません。かくして、主観的には「真実追求

者」、客観的には「神託を逃れんものともがく牡牛」であったオイディプスは、最後に、彼の思いを越えて、つまり運命によって、神託によって、さらに言えばアポローンによって、真実の発見者とされるのです。すなわち、神託の正しさが彼自身の数奇な生涯を通して証明される、その意味で、オイディプスは、真実の顕現の器とされ、かくて主観的視点と客観的視点の対立は止揚される——『オイディプス王』とは実にそのような悲劇だったのです。

岡道男先生の直接の教え子でもなかった人間が、失礼をも顧みず、先生の絶筆となった御論考からまた新たな刺激を与えられて、拙い所感を綴らせていただきました。このような機会をお与え下さった本文集発起人の方々に心から御礼申し上げます。岡道男先生のこれまでの西洋古典学界における輝かしい御業績と、私たち後進に賜った御指導に心から感謝を捧げ、慎んで御冥福をお祈り申し上げます。